

**こども未来会議（第 12 回）議事録**  
**5 月 29 日（水）17 時 30 分から 18 時 30 分まで**

**【小松部長】**

それではただいまより、こども未来会議の第 12 回会議を開会させていただきます。本日はご多用の中ご参加をいただきまして誠にありがとうございます。会議の事務局を担当いたします、東京都子供政策連携室企画調整部長の小松と申します。

本日の出席者につきましてご報告をさせていただきます。本日は 1 名オンライン、6 名対面にて 7 名の委員全員の方にご出席いただいております。加えまして、3 月に実施をさせていただきましたアイルランド派遣事業におけます渡航引率者 1 名の方と、渡航した 10 名の中高生の皆さんにご参加をいただいております。

参加者の方を、ご紹介をさせていただきます。まず引率者代表、東京経済大学現代法学部長教授、弁護士、野村武司様でございます。そして 3 月にアイルランドを訪問した訪問団の皆さんです。皆さんどうぞよろしくお願いいたします。

それでは画面の次第に沿いまして進めさせていただきたいと思います。開会にあたりまして小池知事よりご挨拶をお願いいたします。

**【小池知事】**

はい、皆さんこんにちは。今日はですね、こども未来会議へのご参加誠にありがとうございます。そして、10 名の皆さん、公募で選ばれた中高生の皆さんが、なんとアイルランドを訪問してこられたということです。現地の子供たちといろんな交流があったと思いますけれども、子供にね、やさしい国作りについて考え、また学んでくれたその成果もお聞きしたいというふうに思っております。

今日はその報告で、テーマは「アイルランドで私たちが学んだこと」、もうそのものですね。はい、皆さんからの発表を楽しみにしています。東京都はですね、いろんな政策があるんですね。もう一国に等しい、いろんな医療から教育から、それから道作りから、もう本当にあらゆることをやっているんですけれども、そういう中で政策をですね、この子供目線で考え直してみたらどうか、捉え直したらどうかということで、色々で見直しをしています。その結果、「こども都庁モニター」、それから最近はやっぱり SNS ですね。皆さんから、子供さんの声をちゃんと聞いていこうということで、それによって政策のバージョンアップに努めております。

未来を担うのは皆さんたちです。皆さんがどういうことを考えて、どういうふうにしてほしいのかといったこともしっかりと聞き、そしてそのことがチルドレンファーストという言葉、また政策を実行しているんですけれども、それにさらに磨きをかけていけばと思っています。ぜひアイルランドで気づいたこと、それからこうすればいいなと思ったことなど、今日は自由に話していただければと思っています。

委員の皆様方には訪問団との活発な意見交換よろしくお願い申し上げます。ありがとうございます。

【小松部長】

ありがとうございました。それではここからの進行につきましては、今回の訪問団団長のゆうなさんをお願いをしたいと思います。

ゆうなさん、よろしくお願いします。

【ゆうなさん】

はい、それでは私の方で務めさせていただきたいと思います。本日のテーマは「アイルランドで私達が学んだこと」です。最初に今回のアイルランドの訪問の概要を説明いたします。

今回、私達は「ワールドキャンパス in アイルランド」というプログラムに参加しました。これは子供にやさしい東京を実現するため、海外の子供にやさしいまちのあり方を学び、発信するプログラムです。なぜアイルランドかということですが、アイルランドは多様な方法で子供の声を取り入れ、政策に反映させている国の一つです。例えば、全 31 行政区にコーラナノグと呼ばれる子供評議会があり、10 代の若者たちが、定期的に地域の課題等について話し合っています。

昨年秋にこのプログラムの募集があり、私達 10 人が公募で選ばれました。出発当時の学年は中学 1 年生から高校 3 年生まで、学校は私立、公立など様々な学校から集まっています。このプログラムは、年間を通じたプログラムであり、出発するまでに 5 回のワークショップがありました。前半は有識者の野村さん、平野さんから東京都こども基本条例などについて学び、後半は現地での英語によるプレゼンテーションの作成と準備をしました。

そして 3 月 25 日から 31 日の間、アイルランドに渡航しました。首都のダブリンだけでなく、第 2 の都市コークも訪れて、現地の子供たちと交流する機会が数多くありました。頑張って英語で交流する機会も沢山あり、お互いの文化の違いや学校生活、趣味などについて話し合えて、大変貴重な経験になりました。

渡航の様子については、ダイジェスト動画にまとめています。私達の訪問の様子をぜひご覧ください。

(動画視聴)

それでは、班別の発表に移りたいと思います。最初の発表テーマは東京都こども基本条例ハンドブックです。

ハンドブック班のももさん、よろしくお願いいたします。

【ももさん】

はい。私達の班は、東京都こども基本条例ハンドブックについて、アイルランドの子供評議会であるコーラナノグで発表を行いました。去年約 30 名の子供編集者によって作成さ

れたこのハンドブックは、現在、都内の学校や図書館など合計約 7000 ヶ所に配布されています。漫画やイラスト、クイズを使ったわかりやすく共感しやすいデザインや、様々な年齢、言語に対応しているこのハンドブックは、私達が誇りを持ってアイルランドに紹介をした素晴らしいアイテムです。しかし、私達はまだこのハンドブックにはいくつかの問題が残されているとも感じています。特に子供の教育や保護に携わる大人たちにハンドブックの内容を普及することについては、アイルランドも同じような課題を抱えており、SNS での更なる発信が必要との意見が出ました。アイルランドの子供たちに東京都こども基本条例ハンドブックについての感想を聞いたところ、アイルランドではこのようなハンドブックによる普及活動を行っていないため、新鮮な活動に触れる良い機会だったとの反応も得られました。イラストを多用し、視覚的にわかりやすくした点や子供編集者の意見を取り入れた形は、特にアイルランドの子供たちにも好評でした。

一方、提言もありました。それはハンドブックや、この活動でも多く使われてきた「こども」という言葉についてです。本来、東京都こども基本条例で示されている「こども」は 18 歳未満の未成年ですが、「こども」と聞くとどうしても小学生くらいまでの子を想像してしまいがちではないでしょうか？私達が「こどもの最善の利益を最優先にする」という東京都こども基本条例の基本理念を貫くには、より多くの、そして正しい対象のこども自身がこの権利に守られていると気づくことが必要です。今苦しんでいる若者を 1 人でも取りこぼさないようにするためには、コーラナノグの意見を参考に、言葉や表現を工夫し、もっと幅広い世代に伝わってほしいと願っています。政治に期待をせず、国から関心を持たれていないと感じる若者が増えてきていると言われる今、東京都が子供に優しいまちを実現するためには、大人たちに意見を聞いてもらえ、真剣に考えてくれている、と若者たちが感じ、そして実際にその意見を取り入れた取り組みが実践されることが何より大切だと私は考えます。

最後に、この度はアイルランドに行き、子供の声を聞くことや、子供の権利について深く考えるという貴重な機会をいただけたことに感謝いたします。以上で私達の班の発表を終了します。ご清聴ありがとうございました。

#### 【ゆうなさん】

発表ありがとうございました。

それでは質疑応答に移りたいと思います。まずは、大空委員お願いいたします。

#### 【大空委員】

はい、ありがとうございました。まさに「こども」という、言葉の持つ意味合いというのが、私も先日 25 歳になったんですが、皆さんからしたらもうおじさんだなと実感しましたね。当時小学生のときは、やはり 18 歳ってすごく大人に見えたし、18 歳の頃はやっぱり小学生って自分よりすごく年下だなんて思っていたんですよね。それがいつの間にか 18 歳以

下、子供、若者、若年層ということで一括りにして、そこまでいいんじゃないか、違和感がない、というような感覚の変化というのが無意識にもあったなというのを実感しました。

今回その条例のハンドブックについていろんな貴重なご意見をいただいたのかなと思うんですけども、やっぱりこのハンドブック、まさに皆さんの周りの世代に広げていくということがすごく大切だと思うんですね。同時にやっぱりこういう問題に関心を持てる人と、なかなかそうじゃない人の差があると思います。皆さんは関心を持っておられる層だと思いますので、この SNS を通じてもそうかもしれませんが、その周りの皆さんに、皆さん自身がハンドブックも含めて、子供のいろんな取り組みを広めるために何かもしアイデアがあれば教えていただきたいなと思います。

【ゆうなさん】

ありがとうございました。次、大谷委員お願いします。

【大谷委員】

はい、こんにちはありがとうございます。今日は今、国連の委員会の関係でジュネーブにいますのでオンラインでの参加で失礼します。アイルランドに行かれた発表、大変興味深く拝見しました。すごく短い期間だけれども実りの多い活動だったんじゃないかなと、伺っていて思いました。

ちょっと感想なんですけれども、子供と若者って言葉遣いの話が出てきました。この話は実は今、世界のあちこちで結構議論になっています。アイルランドの子供たちだけでなくいろんな国の子供が「子供」って呼ばれる、特にわりと年齢の高い 18 歳近い子供が「子供」って呼ばれるのが嫌だと子供自身が言っていたりとかします。他方「若者」っていう言葉を使ってしまうと、若者は何歳からなのかっていうので比較的、国連では若者は 15 歳からっていうことになっているので、そうすると低年齢の子供が含まれない、ここをどう解決したらいいのかっていうのが結構問題になっているので、子供たちからそこについての意見も今後聞いていきたいなと思っています。私個人は実は U18、アンダー 18 って言えば全部含まれてわかりやすいんじゃないかと個人的には思っているんですが、現在国連子どもの権利委員会の委員で、条約は「子ども」と言っているので、なかなか U18 っていうのを広げましょうというのは言えないんですが、個人的にはそんなアイデアを持っています。

私から一点質問をさせていただきたいんですが、普及啓発についていろいろ課題もあるってお感じになったってということで、アイルランドの子供さんたちからの提言もあったってことなんですけど、その SNS での更なる取り組みっていうのに、あの子供たちの間で SNS が繋がって広げていくっていうのは比較的取り組みやすいのかなと思ったんですけど、教育とか保護に関わる大人たちに広げていくときにその方たちの研修にハンドブックを取り入れるっていうのはあると思うんですけど、子供たちからそういう大人の方たちにどう知ってもらったらいいかっていうので、何かもしアイデアとかあれば、あるいは今後の普及、

何か具体的には考えてらっしゃることがあれば教えていただきたいなと思いました。以上です、ありがとうございます。

【ゆうなさん】

ありがとうございます。いちかさんお願いいたします。

【いちかさん】

はい。アイルランドの同世代の方たちとディスカッションをする中で、アイルランドにも似たようなハンドブックがあることがわかりました。そこで、そのハンドブックはいろいろな人に広まっているのかを聞くと、コーラナノグの子供たちなどの特定の人しか広まっていないことがわかりました。これは日本でも同じだと思うので、国が違っても課題は同じなんだと思いました。

他にも施設の一角にラジオステーションがあり、子供たちが自由に要望を伝える場所があったり、ユースアドバイザーパネルでは、子供たちの要望を政府に伝えることができ、実際に改善されたこともあると聞いて、アイルランドでは子供の声を聞く体制が整っていると思いました。

そして実際に子供の声を聞いて作られた公園も視察することができました。

ディスカッションをしてみて、アイルランドの子供たちは自分たちがどうなりたいのかをしっかりと考え、自分なりの意見や思いを強く持っていると感じました。

このようなことが、子供に優しいまちを作っているんだと思います。そして日本のこども基本条例のハンドブックをいろいろな方に渡したとき、どこでも喜んでくださり嬉しかったです。

【ゆうなさん】

ありがとうございました。では次の質問に移りたいと思います。松田委員お願いします。

【松田委員】

どうも、ありがとうございました。本当に子供の声を聞く条例ハンドブックでですね、そういうことが進むって素晴らしいことだなと思いながら聞いていました。逆に大人にとっての子供ってというのは、やっぱり大人からしてもわからないとか知らないとか、そういう位置にもなるから逆にその対話をするのではとするとか、そんなことも多いんだと思いながらも聞いていたんですね。だから子供コンサルみたいなことも何か繋がりの中で出てくるのかななんてわくわくして聞いていました。

ちょっと僕の方から質問したいなと思ったのは、こうして二つの国で日本とアイルランドで子供の声を聞くってことがあるんですけども、二つの国の違いってというのは、何か感じたことがありますか。

【ゆうなさん】

りょうやさん、お願いいたします。

【りょうやさん】

はい、一番印象に残っていることとしては、日本の学校に置かれている、いじめや悩みについて相談できるスクールカウンセラー制度っていうものが子供政策に先進的なアイルランドでは、置かれていなかったということがありました。また日本に比べてアイルランドでは、学校内で子供のための子供による組織というものが無いということも聞きました。

他にも例えばディスカッションをしていく中で、日本ではよく聞く、生徒が主体となって生徒自身の要望で校則を変えたという経験もないと言っていました。この点は、日本は誇ってもいいのかなと思いましたが、やはりアイルランドにそもそも校則という概念があまり文化としてないので一概には言えないなと思いました。

しかし、コーラナノグやコーク市議会等でも話した若者たちのことを考えると、もしアイルランドに日本に今あるような生徒会組織であったり、そういった子供の声を大人に伝えるという組織があったら、熱意を持って参加するんじゃないかなと、そしてうまく活用していくんじゃないかなと思いました。以上です。

【ゆうなさん】

ありがとうございました。次のテーマに移りたいと思います。次のテーマは、子供の居場所です。子供の居場所班のりゅうさん、よろしくお願いいたします。

【りゅうさん】

はい。私達の班はコーク市の若者の前で、近年日本で関心を寄せられている子供の居場所について発表しました。居場所を「安心できる、友達がいる、楽しい感情が生まれる場所」と定義し、そこから三つの具体例を用いて紹介しました。

まず一つ目に、居場所としての学校を紹介しました。学校は学ぶだけでなく、学校生活や部活動に励む大切な場所であり、生徒たちにとっても居場所となっています。しかし、そんな学校も近年では学校に行くことができなくなってしまった子供が増加傾向にあります。一方、アイルランドでは不登校自体が少ないと認識しているという説明があり、不登校を問題として意識されている様子がありませんでした。これは次に紹介するフリースクールと関係があるからかもしれません。

二つ目は、フリースクールについて紹介しました。多様な学びの機会を確保するという観点で、フリースクールは設立されており、これらの制度、そして都の支援について紹介しました。アイルランドでもフリースクールに相当するシステムが存在し、通常の学校教育とは異なり、体験実践型の自由教育が行われていました。子供たちには不登校の場合の受け皿が

用意されており、ネガティブなイメージがなく、選択肢の一つになっていると考えられます。そのため、アイルランドでは不登校が少ないと認識されているのかもしれませんが。

そして最後に公園を紹介しました。東京都は公園の数が多くあり、インクルーシブ公園、また子供の声を取り入れた公園も増えてきています。これらの紹介を行い、都の年齢における利用方法、利用時間をまとめたものを発表しました。日本の子供の公園利用は主に小学生までが多く、中高生と年齢が上がるにつれて公園はあまり身近な存在ではなくなります。我々はこの点においては、アイルランドでも同様だと考えていました。しかし、実際に話してみると、アイルランドでは多くの中高生が日常的に公園を利用していると聞き、とても驚きました。都では地域の公園でボール遊びが禁止であることが多いですが、アイルランドではボールを持って、中高生が友達と一緒に公園に遊びに行くのはとても日常的なことで、そのための設備も充実しています。また、これも聞いた話ですが、子供に限らず絵を書くために公園を利用しているという人もいます。実際に視察では、普通の街の中に広い公園があり地元の人々の生活の動線の一つのようでした。僕は、公園はそれ自体が独立した存在ではなく、生活の中に、街の中に一体化していた印象を受けました。

今回、アイルランドで最も印象に残ったのは、子供の居場所の定義の違いです。アイルランドでは、子供の居場所を「子供の想像力を活かせる場所」と定義していました。子供たち1人1人のアイデアが尊重され、それを活かせる場所が用意されていました。実際に公園作りの案として、粘土でアイデアを形にするという企画が行われていたりもします。また、学ぶ場所を自ら選択できるのも、自分らしさを大切にする表れだと感じました。想像力が生まれるためには、それを受け入れる受け皿が必要ですが、アイルランドではそのような体制が整っていると感じました。

以上で発表を終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【ゆうなさん】

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移りたいと思います。まずは、池本委員、お願いいたします。

【池本委員】

はい、発表ありがとうございました。私もアイルランドの子供の居場所について非常に勉強になりました。特にそうやって自分たちで公園を、やり方を考えられるなんていうのはちょっとわくわくして、そういうのが日本にもあったらいいなとも思いましたし、学校の問題で不登校がアイルランドにもないわけじゃなくて、それが選べるようになってから不登校の概念がないっていうのも、日本では何かすごく不登校ってそこにフォーカスされてしまいますけれども、そうやって選べる選択肢を増やすってことが日本にも必要かなというふうにお話を伺って思いました。

その想像力を働かせるっていう、自分たちで作れるっていうところについても、何か日本

だと公園の使い方とか何か飲食禁止とかですね、何かそれが何かルールに自然とそれを守らなきゃって何かとらわれちゃっていますけど、本当はそうやって、どうやって使ったらもっと楽しいとか、さっきその公園を、絵を書くためっていうのもちょっと日本だとあんまり発想浮かばなかったですけども、そうやって居場所のこともちょっと今発想を広げて考えられるかなと思ひましてありがとうございます。全体としてそういう場所をいろいろ見られて、どんなことを感じられたのかなということをお伺いできればと思います。

【ゆうなさん】

とみーさんお願いいたします。

【とみーさん】

はい、アイルランドに行ってみて、日本の居場所ってなると落ち着くだったりとか静かだったりするところを居場所って考えると思うんですけど、アイルランドでは話し合いの場を居場所って考える人が多くて、先ほどの話、コーラナノグには車椅子に乗ったメンバーがいて、過度な配慮がしておらず、差別もなかったのもすごかったです。その様子からアイルランドでは障害のある人との壁はないんだなと思いました。それに加えて、コーラナノグではグループ全員が青いメンバーT シャツみたいなのを着ていて、日本の居場所とかだと、個人個人の理由で集まっているっていう感じがあるんですけど、コーラナノグではグループ全体での結束力が見られた感じでしたね。

最後にアイルランドの人たちと交流して、日本には社会とか政治に対して子供たちが話し合う場が少ないのかなと感じました。今回のプログラムのように子供たちが海外に行ってそこで学んできたことを生かしていくような機会があるのはとても良いと思いました。このような企画をもっと増やして、こういう機会を作るだけでなく、それを学んできたことを活かせるような東京だったらいいなと思いました。以上です。

【ゆうなさん】

ありがとうございます。次に大空委員お願いいたします。

【大空委員】

発表ありがとうございます。去年「こどもの居場所づくりに関する指針」というのをですね、こども家庭審議会というところで議論をして作りました。私も委員に入っていたんですが、この芸術とか想像力というところあんまり盛り込めなかったなというのを、発表を聞いてすごく反省をしました。どこかで必ず議論に入れなきゃいけないと思います。

質問、今日は都知事もいらっやっています。いろんなアイルランドの状況を見て、将来どういった東京になってほしいのか、ぜひ聞かせてください。



【ゆうなさん】

ゆいさん、お願いいたします。

【ゆいさん】

はい。将来の東京は子供の居場所を作る際などに、実際にどのような場所を作ってほしいのかなど詳しいことを子供たちと相談しながら、その意見を取り入れ、実際にその場所などを実現することができる東京になってほしいと思います。また、子供のことについて決めることがあったら、アイルランドと同じように一緒に考えて取り組んでいくことができ、子供の意見や考えを実現することができるまち、東京を目指していけたら良いと思いました。

他にも子供たちが参加して楽しい、自分の将来なりたいと思うものを見つけることができる、このようなことを達成するプログラムを作り、実現させるということです。例えば今回、私達が参加したワールドキャンパス in アイルランドのような海外に行くプログラムや、子供たちの意見で物を作ってみるなど、個人個人がやりたいと思えるようなものを考え、実行することで、子供たちの未来が広がり、寄り添っていくことができると思いました。以上です。

【ゆうなさん】

ありがとうございました。最後に日本の教育（進学、学区制度、給食、デジタル）についての発表です。日本の教育の班のさくらさんお願いいたします。

【さくらさん】

はい。私達の班は、日本の教育をテーマに、進学、学区制度、給食、デジタル分野の四つをユースアドバイザーパネルの皆さんの前で発表しました。その中でも今回は、教育のデジタル化についてお話ししたいと思います。

現地での発表では、コロナ拡大を背景とした GIGA スクール構想について、デジタル化のメリット、現状の達成度、今後の課題について発表しました。アイルランドを訪れ、特に強く感じたのは、日本が教育のデジタル化を急速に進める反面、現地ではそれ以上に対話を大切にしているということです。例えば私達も同年代の四つの団体と交流しましたが、そのどれもが、アイスブレイクとして、話し合いの前にちょっとしたミニゲームを行ったり、自分の好きなときに飲み物が飲めたり、施設全体がカラフルで明るい印象だったりと話しやすい雰囲気作りを積極的に行っていました。それは本当に些細なことかもしれませんが、子供にとって自分の意見を受け入れてもらえそうと感じさせる工夫だと考えました。

現地では、デジタル化のメリットとして、端末の直接書き込み送信機能を用いることで、生徒は自分の意見を書き込む機会が増え、教員は手元の端末 1 台で、その意見を把握することができる双方向型授業の実現を挙げました。しかし渡航を通して、自分の意見が本当の意味で相手に届いているのかを可視化しづらいというデメリットがあることに気づかされ

ました。

教育のデジタル化を進めることは、子供の学び方や教員の働き方にきっと革命を起こすでしょう。しかしそれらを急ぐばかりに、子供との関わりが作業化してしまえば、数年後私達は人の意見を知るために、画面と向き合うようになるのではないのでしょうか？あくまで教育のデジタル化は、より子供にとって学びやすい環境を、教員にとって働きやすい環境を作る目的を達成するための手段であること、本質的な人と向き合うということは、やはり対話にあるのだなと感じられたことは、デジタル化の進む現代を生きる私達にとって、とても重要な学びだったなと感じます。

その他にも、現地では公園を用いた地域コミュニティ作りなども行っており、農業高校生としては非常に興味深かったです。今後もデジタル化の進む教育に自分の視点で向き合っていけたらと考えています。以上です。

【ゆうなさん】

ありがとうございました。それでは質疑応答に移りたいと思います。まずは石山委員、お願いいたします。

【石山委員】

はい、さくらさんありがとうございました。本当に人が豊かになるために、そのための手段としてデジタルがあるということに気づかれたというのは、本当に重要なことだというふうに思いました。

今、私達の取り巻く世界というのは、AIをはじめ本当に急速にデジタル化が進んでいます。その陰には、例えばAIが進みすぎると仕事が奪われてしまうんじゃないとか、またはフェイクニュースが広がって何か犯罪だったり問題がより起こってしまうんじゃないか、いろんなことが言われています。そういった中でデジタルを通じて私達が豊かな社会を作っていくためには、やっぱりデジタルというものが人にとって何が大事なのか、これをやっぱり対話をしていくというのが最も重要になっていくと思いますし、私達の倫理感が問われる瞬間というのが今後どんどん増えていく、と思います。そういった中で、まずは対話をしようよというのはとても大事だと思いましたが、今回皆さんが作ったことも基本条例もそうですけれども、デジタル化が進んでいくと、さらに政策を変えなきゃいけなかったり、または新しい法律が必要になる瞬間も来ると思います。そういったときには学校の対話だけじゃなくて、もしかしたらこういった法律が必要なんじゃないか、こういった政策が必要なんじゃないかっていうことを提言していく、それも一つの選択肢なんじゃないかなと思いました。

質問に移らせていただきたいと思います。全体を通じてこのアイルランドの教育について感じたこと、発表された以外にもしあれば教えてください。

【ゆうなさん】

あつさんお願いいたします。

【あつさん】

はい。私は初めて外国へ行ったのですが、現地の中高生と意見交換をして、彼らが1人1人立派な意見を持っていたこと、そしてそれを積極的に伝えていたことをすごいと感じました。今の日本では、社会に対して意見を持っている中高生は多いとは言えないと思います。一方で、アイルランドでは、日頃の学校の授業でディスカッションを取り入れていたり、放課後や週末にあるユースアドバイザーパネルやコーラナノグでは、地域における社会問題や課題について自分の意見と他人の意見を互いに伝え合い、深め合っています。そのため、アイルランドの若者は自分の意見と他人の意見をお互いに積極的に伝え合い、また相手の意見を尊重できるのだと思いました。

今回、アイルランドを訪問した参加者の多くは海外で生活した経験があったり、私立中学や高校、都立中高一貫校に通っている人も多く、様々な経験を通じて、しっかりと意見を持っている人が多いと感じました。私の通っている学校では、社会問題や課題に対して議論したり、学んだりする機会は少ないですが、今後いろいろな経験を通じて、しっかりと意見を述べられるように見習わなければいけないと思いました。

【石山委員】

ありがとうございます。

【ゆうなさん】

ありがとうございました。次に小林委員お願いいたします。

【小林委員】

はい。まず全体なんですけれども、本日皆さん素敵な発表ありがとうございます。私自身も知らないことが沢山あって聞く度に勉強になって、もうメモが、メモするのがもう必死になりながら家に帰ってからもっと勉強しなきゃと思うような時間になりました。

そしてこのように先ほどの対話というコメントがすごく多く出ていたと思いますが、やはり対話というのは、今日もそうですけれども、とても大切なことだなというのは改めて感じつつ、あととみーさんもね、おっしゃっていましたが、対話をして話が上がってそれが今度具現化されていくっていうことが今後この後進めていけばいいなと思っていますし、今日皆さん、アイルランドに行くという機会がありましたけれど、私も皆さんのような年齢のときもう数十年前になりますけれども、もしこういう機会があったらぜひ参加して皆さんのように何か体験をしたいなというふうに、とても羨ましく感じました。

ではちょっと質問なんですけれども、日本と海外、教育の違いとか善し悪しいろいろある

と思いますが、その日本と海外の教育での違いというのは、今回って感じることはありませんでしたでしょうか？お願いします。

【ゆうなさん】

あやこさん、お願いいたします。

【あやこさん】

はい、私は日本と海外両方の教育を両方とも受けてきたので両方の教育の良いところ、悪いところは少し知っていました。しかしアイルランドの若者と話すことで日本の教育を、また新たな違う視点で見ることができました。

アイルランドでは日本の教育はやっぱり厳しいというイメージがあるそうです。塾に通ったり、幼い頃から勉強を重視しているということを知っていました。また、アイルランドは”transition year”というものがあるそうです。1年間職業体験や学校外での学びをする年だそうです。その話を聞き、日本との違いに驚きました。日本ではバイトができなかったり、職業体験ができる機会が少ないと感じました。学校の教室外で学べることはたくさんあるので、若者の将来にもアイルランドの”transition year”というものはすごく大切だと感じました。

デジタル面で言うとタブレットを使って授業をしたり、先生に質問を直接送ることができるのでデジタル化は日本と同じぐらい進んでいると感じました。

LGBTQ のことは向こうの方が進んでいましたが、カウンセラーがいない学校も多いそうで、メンタルヘルスの面では日本の学校の方が進んでいると考えました。しかし、日本の社会ではメンタルヘルスのことについてあまり触れられていないということをあわせて感じました。

アイルランドの人の話を聞くと、自分は日本の教育に慣れているので競争が激しいということを感じたことがないと思いました。人生において競争というものは必要ですが、それと同時に、職業体験や授業以外での経験を積むのは大切だというディスカッションを踏まえて感じました。勉強の仕方や教育の受け方に正解はなく、答えは一つじゃないっていう結論に自分の中で至りました。

ありがとうございます。

【ゆうなさん】

各班の皆さん、委員の皆さん、質疑応答ありがとうございました。これで私達からの発表は終わります。ここからは秋田座長に進行をお願いしたいと思います。

【秋田座長】

はい、ゆうなさん進行をどうもありがとうございました。

それではですね、まず小池知事からコメントを頂戴したいと思います。これまでの中高生の皆さんのご発表、質疑などを聞かれましてご意見を頂戴できましたと思います。よろしく願いいたします。

#### 【小池知事】

はい、まず皆さんが全然違う文化、また地理的にもいろんな全く違うアイルランドにいらして、そして子供たちとまた現地の方でいろんな方と会って対話をして、今報告を伺ったところですが、まず皆さんのプレゼンテーション、レポート素晴らしいですね。言葉も明確に考え方も明確に、そしてそれぞれの主張といいましょうか、今回アイルランドに行ったことによって、どういう気づきがあったのか、などなどとても簡潔にまとまっていたなというふうに思います。また、アイルランドに行ったことによって、いろいろこれまで考えもしなかったようなことにも気づいたり、それからデジタルが進みすぎると逆に別の問題というか、リアルに会うって対話することの重要性とか、そもそもいじめという概念がないのかもしれないですね。それから不登校という概念もないし、ですからあと公園も子供たちが望むような公園をとという話ですが、なかなか公園っていうのも、都立の公園もあれしちゃ駄目これしちゃ駄目と、Don'tの方が多くて、Doがなかなかね、日本ってない場合がありますね。あと、みんな自分でちゃんとそこはわかって行動してねっていうその辺のところが、海外の場合と国によって違うんだろーと思います。

東京都はできるだけ皆さんの声を聞きながら、だからこそこども条例をつくり、そしてそうですね、年齢によってちゃんと伝わるように、英語版も色んな言葉でも伝わるようにしていますけれど、本当に皆さん異文化に触れた、それがあつた種のショックだったかもしれないけれど、いいショックだったのではないのでしょうか。そして、それぞれのハンドブック班、居場所班、教育班、それぞれ切り口を変えて、そして皆さんでその結果を共有しておられるんだろーというふうに思います。

今回、短い時間で、日程ではあつたかと思いますが、またこうやって仲間もできたことですし、これからもですね、子供の声聞こうという姿勢を東京都は常に持っていますので、これからもアイルランドの経験も踏まえながら、また日常感じることを、こうしたらいいのにな、ああすればいいのにとか皆さんの声をですね、これからも聴き続けていきたいと思っていますので、どうぞ、どしどしお寄せください。

感想で質問はないのね、私はね。はい、ありがとうございました、良かったですね、はい。

#### 【秋田座長】

はい、小池知事どうもありがとうございました。それでは続きまして、このアイルランドに引率された野村さんの方からもコメントをいただきたいと思います。お願いします。

【野村先生】

ありがとうございます。今回日数としては6日ないし7日だったんですけども、1日目、2日目、3日目という先ほどのダイジェストからわかる通り、正味活動する時間が3日しかありませんでした。そういった中で、観光する暇もなく、お土産を買う暇もなく、円安を体験する暇もなく、本当に忙しい中、子供たちがすごく頑張ってくれたと思います。他方で、とても楽しいこともあって、向こうの子供たちと、それぞれがお土産交換というのもその一つでした。とみーが被っているあの緑色の帽子はそのお土産交換のときに向こうの子供からもらったものなんですね。とても似合っています。

実は私、今回一緒に引率した平野裕二さんと一緒に2022年にChild Friendly Cityの国際会議（正しくはChild in the City World Conference）でアイルランドを訪れました。その際に大変感銘を受けたのは、その子供に関することを決める大人の非常に近いところに必ず子供たちがいる。そしてその子供たちが自分たちでテーマを見つけて、活発に意見交換をしてそれを大人に伝えて、それがいろんなところに反映されていくっていうそのあり方に非常に感銘を受けました。今回ここにいる10名の子供たちはこのために編成された10名で、このため以外に集まることのない10名です。その意味では日頃から一緒に活動しているアイルランドの子供たちとはハンディがあったわけですけども、それを感じさせないほど非常に立派に務めてくれたように思います。

テーマ選定としては、ハンドブックは紹介してほしいなというのはあったんですけども、あとのテーマについては、ほぼほぼ彼らがいろいろ選んで、自分たちで内容も決めてくれたということで、その意味では本当にアイルランドさながらの子供たちの活躍には本当に感銘を覚えています。

今回英語を喋ることを必須としませんでしたけれども、それぞれ行った先で自分たちの団体紹介をそれぞれが英語で行ったり、あるいはプレゼンテーションを英語で行ったりしました。その際、こちらからのプレゼンテーションに対して向こうから質問が来るっていうのはある程度いろんなことが想定できるんですけども、逆に向こうの子供たちのプレゼンテーションについて、その中身ってのが最後までなかなか分からなかったっていうこともあり、それに対して質疑応答したという経験は大変スリリングな体験だったんだろうなというふうに思っています。

こども基本法11条で子供の意見を反映させるための措置をとるものとするとしていて、それは自治体にも義務付けられています。しかしアイルランドなんかを見てみますと、子供の意見を聞き反映させるということは子供の権利であるということと同時に、その文化であるっていうことを非常に強く感じました。大人はいつまでも大人なんですけど、子供はすぐに大人になってしまいます。今回の渡航はある意味ではその文化のきっかけになるものだったと思うんですけども、その意味で文化は繋がりが必要ですので、この機会を無駄にすることなく繋げていって、子供の参加、子供の声が反映される取組、それが東京都の文化になってくれればいいなと思っている次第です。私からは以上です。ありがとうございます。

した。

#### 【秋田座長】

野村さんどうもありがとうございました。それではそろそろ時間でございますので、私の方からも最後に一言申し上げたいと思います。

中高生の皆さんの班のご発表も、それからそれぞれの質疑へのご意見も本当に私は心を動かされるような、自分の言葉で、自分の思いを語ってくださいましたことを感謝申し上げます。

先般、政府の方では子供政策の基本的な方針を定めたこども大綱を決定しました。私はこの委員長をさせていただいてもいるんですけれども、国全体で今子供の視点に立って政策が進められようとしています。東京都はそれを、一歩先をリードしてやっているというところであります。都は今回のこのような取組を通じて、今度国際的な視点も取り入れつつ、チルドレンファーストの社会の実現に向けて取り組んでおられるわけです。それを小池知事がリードしてくださっているわけなんですけれども、今回のアイルランド訪問は都の取組を海外に、まさに子供の目線から自分たちの声で発信してくださるという良い機会にもなったと思います。ぜひ訪問団の皆さんが実際にアイルランドで見たこと、それから感じたことは得がたい経験だったと思いますので、ぜひこれをですね、保護者の方や、それから先生や友人など周りの皆さんと今回アイルランドの訪問の経験をぜひシェア、分かち合ってシェアリングしていただいて話し合うということで、さらにまたもう一歩ですね、皆様の視野を広げていく再発見していくというようなこともしていただけたらいいなと願っているところです。

委員の皆様、東京都の皆様、訪問団がアイルランドの訪問で何を感じたのかどう思ったのかっていうことをもっともっとあったと思うんですけど、そのごく一端を限られた時間の中ですけれども聞くことができました。子供たちから見える世界というのがあります。大人が子供の目線、子供目線から世界がどう見えているのかということを知ろうとし、それに一緒に考えていくということが私達の未来、東京都の未来を考えていくことに繋がっていくのではないかと思います。都には今回の訪問で得られました視点や知見をしっかり受け止めて、それを今度また皆さんのご意見を東京都の政策にぜひ生かしていただきたいと思いますところであります。最後になりますけれども、ぜひ小池知事より閉会の言葉をいただきたいと思います。

#### 【小池知事】

秋田先生ありがとうございます。そしてまた、今日も野村先生ご苦労様でございました。忙しい旅でしたね。皆さんも時差ぼけなんかもあったんじゃないかな、ありませんでしたか。そして委員の先生、今日もありがとうございます。こうやって対話して、子供たちの思いなど、こちらの大人がしっかり受けとめて、そしてまた、これからは東京都の施策に皆さんの

声を生かしていきたいというふうに思っております。また、実行していきたいと思えます。

皆さんも中学 1 年から高校 3 年までね、いらっしゃるということで、今回のメンバーの皆さんが年齢、それはそれで、中学 1 年と高校 3 年はチルドレンなのか、U18 なのか、キッズなのか、なかなか定義も難しいところですけど、さあ皆さん、10 年後の自分って想像したことありますか。10 足してみて、とみーくんはどう？何してるかな。そのときにどんな東京であってほしいかな。そういうことを皆さんの声を聞かせてほしいというふうに思えます。ぜひ自分は社会でこんなことをやってみたい、あんなことをやってみたい、そういうときに今回のアイルランドの訪問がとても視野を広げる、先生も今、視野とシェアとおっしゃったんですけれども、視野を広げるという意味では、今回の旅というのは、とても大きな意味をなすんじゃないかなって思えます。

これから将来こうありたい、自分の意見はこうだ、そしてそれをまた伝えることができる、そういう自由な、そして懐の深い社会、東京を作っていきたいと思えますので、これからもどうぞ皆さんも頑張ってくださいと思います。

先生ありがとうございます。以上です。ありがとうございます。

#### 【秋田座長】

小池知事どうもありがとうございました。

本日は委員の皆様、そして野村さん、そして訪問団の皆様、本当にありがとうございました。以上をもちまして、この会議は終了いたしたいと思えます。本当にありがとうございます。